

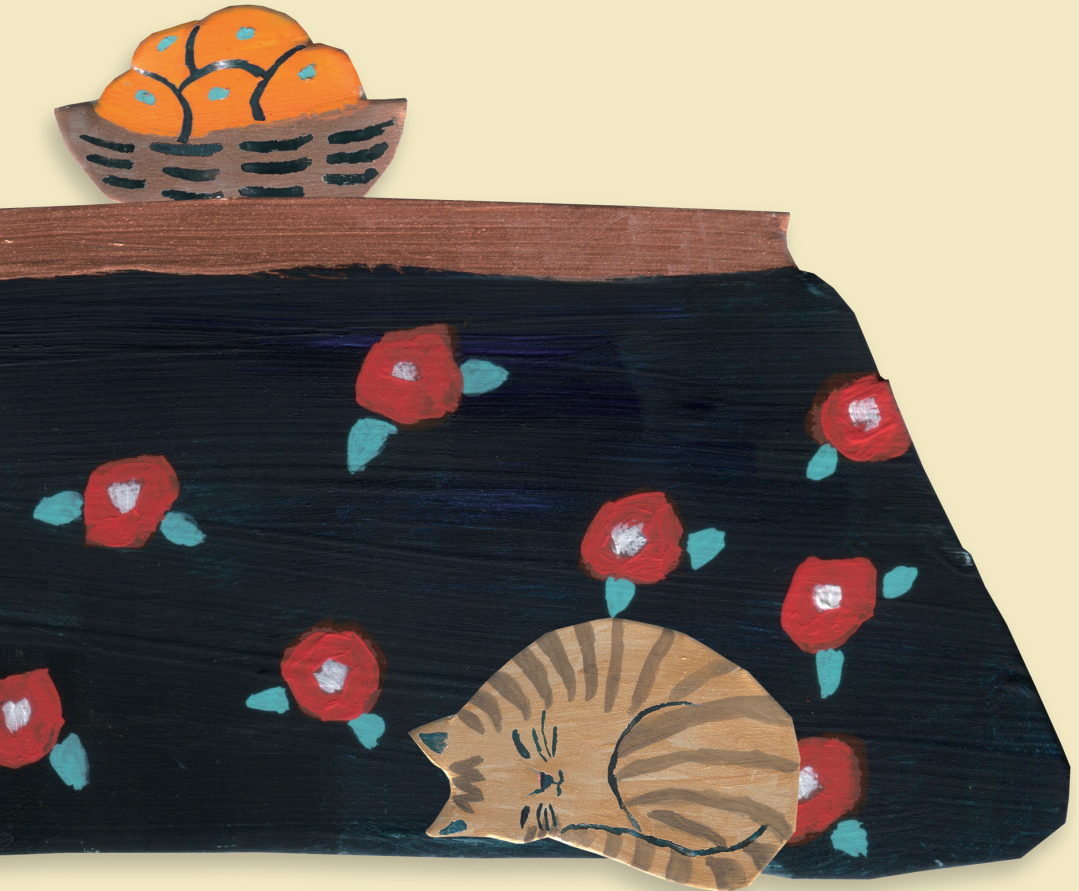
禅の友

Zen no Tomo

11

November 2020

特集 衣替えに思う





ご本山だより

大本山永平寺

【冬安居入制】

大本山永平寺 ☎ 〇七七六・六三・三一〇二



古来インドでは、雨季となる五月から七月までの三カ月間、僧侶は遊行などには出かけず一カ所に留まって共同生活をしながら修行に専念しました。これを安居といいます。元々はサンスクリット語で「雨期」を意味する言葉でしたが、仏教がインドから西域へと伝わり、夏には雨安居（夏安居）を修行し、寒い冬には冬安居を修行するようになりました。安とは「安心、安息、安堵」に加え、「身心を静止の状態にする」という意味があります。居とは「腰を落ちつける、座る、住む」など「期間を定めて住する」ことを意味します。つまり、「一定期間身も心も安らかに静めて住する」修行期間ということになります。安居の期間は外に出歩かないことになっていますので「禁足」ともいいます。また、そのような制約を結ぶことから「結制安

居」ともいわれ、永平寺では十一月十五日から結制安居に入ります。

永平寺をお開きになった高祖大師道元禅師さまは安居について、お釈迦さまよりご自身に至るまで代々正しく伝えられてきたみ教えであると説かれ、次のようにお示しです。

安居をみるは 仏をみるなり
安居を証するは 仏を証するなり
安居を行ずるは 仏を行ずるなり
安居をさくは 仏をさくなり
安居をならふは 仏を学するなり

永平寺の冬は雪深く、社会から閉ざされた環境で、坐禅三昧の冬安居が始まります。果たしてどのような仏さまやみ教えに出会えるのか。その経験は、修行僧が永平寺を出て社会に帰った時に活かされることでしょう。



ご本山だより

大本山總持寺

【ご移転記念日と制中五則】
せいちゅうごそく

大本山總持寺 ☎ 〇四五・五八・六〇二一



十一月五日は、今から一〇九年前の明治四十四年に總持寺が能登から鶴見へ移転し、その遷祖式せんそしきが現在の放光堂ほうこうどうで盛大に行われた日です。

この日、御開山瑩山けいざん禪師・二祖峨山がさん禪師などの御真牌（お位牌）が能登より移され、これをもって正式に本山が移転したことになります。

当日の境内は、ご移転を祝う人々であふれかえっていたことが、翌日の新聞で伝えられています。

この日を記念して、毎年行われている「ご移転記念行持」も、本年は残念ながらコロナ禍の影響で規模を縮小して行います。

特に、期間中大勢の人々が訪れる「つるみ夢ひろばイン總持寺」と「万灯供養会」は中止になります。

さて、總持寺は十月より来年一月までの三カ月間、禁足修行の冬安居結制の最中です。

中でも今月十三日から十七日は冬安居「制中五則」の期間で、最終日には「首座法戦式しゆそほうせんしき」が行われます。

また、今春四月の報恩授戒会が中止となりました。そのため新到和尚さんたちは江川禪師さまから血脈を授かることが出来ませんでしたので、十三日に授脈式を行います。

二十一日は御開山瑩山ごうたん禪師の降誕会え（誕生日）。ご誕生を祝う法要が行われます。

降誕会が過ぎると、いよいよ臘八ろうはつ摂心しんを迎える時節となり、修行僧の顔つきが一段と引き締まってまいります。

選・坊城俊樹

大夕焼富士は黒子になり沈む

静岡県 土屋 きみ江

評

背景には真つ赤な大きな夕焼けがある。それまでは富士山が主役であつたが、今はその夕焼けの手前で影となり、黒子となつて踊るようになっている。富士山の擬人化の句の中ではもっとも特異なものであり、且つ美しい影絵となつた。

バス停やカンナと妻と時刻表

千葉県 甲斐 勇

評

映画のワンシーンのようだ。そこに佇みバスを待つのは妻。なかなか来ないので時刻表を見上げている。その足元は真つ赤なカンナが咲き、これから乗って行く先の楽しみのようなものを象徴する。読み手にも夏の物語が想像できる楽しい句。

◆ 門火焚く昼のほてりの残る地に

山口県 御江 恭子

◆ 夏やせや歩幅大きく踏みだしぬ

大阪府 花谷 広文

◆ 開きたる昭和の色よ水中花

岐阜県 大下 雅子

◆ 蛸壺の山と積まれて浜は夏

広島県 小畑 宣之

◆ 子ども等と畦道で見る遠花火

岡山県 有元 克英

◆ 死に順の狂ふもこの世流れ星

大阪府 柏原 才子

◆ 頑に語らず母の原爆忌

島根県 俵 保恵

◆ 夏座蒲団時の流れに乗り切れず

愛知県 戸田 清子

◆ 永遠の三歳の夏防空壕

群馬県 大淵 洋

◆ 素麺の薬味に典座ひと工夫

東京都 藤森 莊吉

選者吟

あつぱつぱ恋に飽きては鮒を釣る

俊樹

作句小見

「あつぱつぱ」も最近は少なくなつた。このちよつと古めかしい女性性は恋の相手を振つたのだろうか。むしろくしゃしたからフナ釣りをしているのだろうか。しかしなんとも陽気で奔放な女性ではないか。

選・長澤 ちづ

玉音の放送聴きし母の声「これでお父さん帰って来ますよ」

静岡県 杉原 民子

評

作者の父上は無事帰還されたのだろうか。そうであって欲しいと祈る。信じて疑わない三句目の「母の声」が毅然としてひびく。多くの母たちが無事な帰還を心の拠り処に家庭を守ってきた。戦争の悲劇を二度と繰り返してはならない。

砂時計の砂に混じりてさらさらと消えてゆくなり悪しき感情

鳥取県 眞山 博充

評

砂時計の砂が落ちてゆくの無心に眺めていたら昂った感情が静まってきたと詠う。怒りなどと言わずに「悪しき感情」と冷静な語で表現して上句を巧みに収束させている。

◆ 堅実に生きし父母すでに亡く畳の上に座布団二つ

岐阜県 後藤 進

◆ 帰省の子公民館に入り浸り盆の櫓に太鼓打ちおり

秋田県 小田 篤恭葉

◆ カーテンを押しわけ風の訪ふを小鳥の歌が追いかけてくる

秋田県 小松 紀子

◆ 叢より現れいでて一匹の蜥蜴は細きナイフの光

東京都 長谷川 瞳

◆ 残照に昂りて鳴くかなかなや屋敷燭にひと日馬鈴薯揺る

岩手県 穴戸 さとる

◆ 山畑にカツコウの声響きいて吾の豆まきもはかどりてゆく

長野県 山崎 さと子

◆ むらさきの小袖まとひて水無月の空を舞ひつつ君は逝きしか

新潟県 今成 愛子

◆ 親と子の会話が弾む海岸は区民絵出の一斉清掃

鳥取県 山本 浩一

◆ 自肅とて花に青田に見ぬものの思ひのほかにも多くありしよ

鳥根県 横山 豪吾

◆ 新聞の「家庭とは何ぞ」読みたれば「こんがらがった糸である」とは

鳥取県 波田 洋子

選者詠

森の児らと遊動円木こぎし夏もう戻らない時の往反

ちづ

作歌小見

今月は常連の方々に加えて初めて投稿なさった方が多くうれしく思いました。横山さんが詠われているように、外出自肅により短歌へ目を向ける時間的な余裕が生じたということでしょうか。違う風を感じることも前進の力になります。